

ヒマラヤ高地住民の環境認識研究ノート 古川 彰（中京大学社会学部）

ヒマラヤ山稜の北面と南面の高地チベット・ラマ教世界に暮らす人々の環境認識の方法、環境観を今後あきらかにしていくための準備として89年8月から9月にかけてわずかの期間であるがヒマラヤ南面ナムチェ・バザールで予備調査をおこなった。もとより調査期間も短くまとまった考察をすることはできないが、予備調査でえられた知見をもとに以下のような観点から今後の課題を整理しておこう。

①ナムチェ経済の中心のチベット交易からトレッキング関連へ変化の意味—ゾッキョ—

②ナムチェ村の形成とエスニシティの重層性の問題—ルールーとラワー—

今回の調査では医学班とは別に河合、古川、月原の3名はナムチェの基本的なセンサスデータを聞き取りによって収集することが中心であった。それらの基本データは別稿で提示される。

1. ナムチェ経済の根幹としてのゾッキョ

ナムチェ村はヒマラヤ南面の高地3400メートルに位置するクンプ・シェルバ族の村である。際立った特質としてはその村がサガルマタを中心としたヒマラヤ・トレッキングの基地として有名になり、住民の多くがガイドやロッジ経営といったトレッキング関連の仕事についていることであろう。近隣の村々も多かれ少なかれトレッキング関連の仕事に現金収入の多くをたよっているが、ナムチェのように村の半分以上がロッジという状況にはない。

またそこが公認のバザール開催地となっており、週に一度土曜日には近隣の村むらから4,500人もの人々が売買にあつまってくることも、特徴のひとつにあげておかなければならないだろう。

しかし、これらトレッキングもバザールもそれほど古くからナムチェ経済の中心をなしていたわけではない。トレッキングが商売として成り立つようになるのも、バザールが公認されて大規模化していくのも70年代に入ってからのことである。1960年代以前のナムチェの現金収入の中心はゾッキョを使ったチベット交易であった。その交易で多額の蓄財をする者もあった。

70年代に入ると今度はトレッキングが急激にのびてきて、このナムチェが基地となり経済の中心はトレッキング関連へと移っていく。

ナムチェ経済はチベット交易からトレッキング関連へと大きく変化した。この商売替えを可能にした要因はゾッキョにあるのではないかと思われる。月原の表2にもあるようにクンプ地方の他の村落が牦牛を中心にした家畜飼養しているのとは異なって、ナムチェでは家畜飼養が牦牛のゾッキョに特化している。つまりナムチェではチベット交易でもトレッキングでもゾッキョが荷物運びに利用されており、ゾッキョを一貫して経済の中心に持っていきながら、ナムチェ村の経済を展開させてきたことを重要な特質として挙げておかなければならない。この牦牛ゾッキョへの家畜飼養の特化という事実は牧畜の形態だけではなくナムチェの村落空間の配置、さらにはかれらの環境認識をも強く規定すると考えられるからである。

2. ナムチェ村の成立とエスニシティの重層性—ルールー—

このように見てくるとナムチェ村は近隣のクンプの村が農耕と牧畜を中心に成り立っているのとは異なって、きわめて特殊な交易の村のように見えよう。だが月原が述べるようにやはり自給的な農耕が村落生活の基底にあって、そのうえにこれらの現金収入源としての交易が位置づけられていると考えたほうがよい。とはいえナムチェの耕地は狭く隣村のクムジュンとは比較にならないほど

表1 ナムチェ・バザールの世帯主夫婦のルー

世帯番号	夫のルー	妻のルー	世帯番号	夫のルー	妻のルー
80	TIBETAN	REFUGE	110	MANDEWA	RONGSERWA
15	TIBETAN	REFUGE	5	MANDEWA	GURUNG
19	TIBETAN	REFUGE	16	MANDEWA	
21	TIBETAN	REFUGE	111	KAMPA	TIBETAN
35	TIBETAN	REFUGE	58	GURUNG	SALAKA
49	TIBETAN	REFUGE	61	GURUNG	PALDORJEE
50	TIBETAN	REFUGE	98	GURUNG	PALDORJEE
51	TIBETAN	REFUGE	46	GURUNG	LAWA
53	TIBETAN	REFUGE	106	GURUNG	LAMA
54	TIBETAN	REFUGE	8	GURUNG	CHUSERAWA
59	TIBETAN	REFUGE	18	GURUNG	CHUSERAWA
113	TIBETAN	REFUGE	82	GURUNG	CHUSERAWA
115	TIBETAN	REFUGE	60	CHUSORA	TAMANG
11	TIBETAN	TIBETAN	29	CHUSERAWA	TIBETAN
39	TIBETAN	TIBETAN	30	CHUSERAWA	TIBETAN
63	TIBETAN	TIBETAN	65	CHUSERAWA	TIBETAN
64	TIBETAN	TIBETAN	69	CHUSERAWA	TIBETAN
67	TIBETAN	TIBETAN	70	CHUSERAWA	SHANGU
75	TIBETAN	TIBETAN	24	CHUSERAWA	SANGU
92	TIBETAN	TIBETAN	57	CHUSERAWA	PALDORJEE
100	TIBETAN	TIBETAN	4	CHUSERAWA	MANDEWA
102	TIBETAN	TIBETAN	107	CHUSERAWA	LAMA
112	TIBETAN	TIBETAN	7	CHUSERAWA	GURUNG
108	TIBETAN	TIBETA	17	CHUSERAWA	
22	TIBETAN	RONSERAWA	27	CHUSERAWA	
42	TIBETAN	PALDORJEE	52	CHUSERAWA	
114	TIBETAN	PALDORJEE	86	CHUSERAWA	
76	TIBETAN	MANDEWA	101	CHAWA	TIBETAN
25	TIBETAN	GURUNG	104	CHAWA	SALAKA
13	TIBETAN	CHUSERAWA	40	CHAWA	PALDORJEE
23	TIBETAN		95	CHAWA	PALDORJE
81	TIBETAN		97	CHAWA	CHUSERAWA
2	THAKTOKWA	RONSERAWA	103	CHAWA	CHUSERAWA
48	THAKTOKWA	GURUNG	9	BISWAKARMA	BISWAKARMA
60.1	THAKTOKAN	PALDORJEE	87	BISWAKARMA	BISWAKARMA
36	TAMANG		88	BISWAKARMA	BISWAKARMA
79	TAMANG		91	BISWAKARMA	BISWAKARMA
90	SYURE	TIBETAN	94	BISWAKARMA	BISWAKARMA
83	SYURE		56		CHUSERAWA
44	RONSERAWA		32		TIBETAN
74	RONGSERAWA	TIBETAN	33		SYURE
43	RONGSERAWA	MANDEWA	37		SALAKA
55	RONGSERAWA	MANDEWA	85		RONSERAWA
72	RONGSERAWA	MANDEWA	84		PHURAKPA
1	RONGSERAWA	LAMA	105		PALDORJEE
20	RONGSERAWA	CHUSERAWA	6		LAMA
14	RONGSERAWA		93		GURUNG
99	RONGSERAWA		3		CHUSERAWA
73	RANGSERAWA	TIBETAN	66		CHUSERAWA
45	PALDORJEE	LAWA	71		CHUSERAWA
62	PALDORJEE		68		CHAWA

註：表に世帯番号のないものは不明。また表の空白も不明

である。定着農耕を営むにはあまりに条件が悪い場所に位置している。それゆえにゾウの運搬力を中心とした経済とロッジ経営ばかりが目立つのである。

このような特質を持つにいたったのはおそらく村の開発の歴史に由来するであろう。つまりナムチェ村はクムジュンなどより随分遅れて、150年ほど前に成立したといわれる。さきにクムジュンなど平坦な条件のよい場所に村ができてきており、それらの交易の道のちょうど交差路にあたるナムチェの場所に150年ほど前にチベットや他の村から人が移って徐々に村が形成されたといわれる。

ナムチェは交易路の交差点にできた村であるから、先住のシェルパだけではなく交易にきたチベット人なども定着し村人が形成されてきた。結果

として多様なエスニシティが村の中に混在することになり、現在では大きくシェルパ、ティベタン、ティベタン・リフュージ、ネパーリーの四つの層が住民自身の分類するエスニックの層をなしている。

また、シェルパの間は外婚集団としてのルーに分類化されている。各世帯の世帯主夫婦のルーを示した表1ではティベタン、ティベタン・リフュージ、ネパーリーのカースト等が混在して記入されており、不明の部分も含めてこれらの分類をさらにすすめるなければならないが、これらのシェルパのルーからネパーリーのカーストまでふくめて全体が必ずしも平面的にあるのではなく、かなり複雑に階層化されている。表2は現在判明しているルーの成員数を男女にわけて、その婚姻相手のルーがわかるように整理したものである。

表2 ルーの組み合わせ

♀ ♂	CHAWA	CHUSERAWA	KAMPA	LAMA	MENDAWA	PALDORJEE	PHURAKPA	RONSERAWA	SALAKA	SHANGU	SYURE	THAKTOKWA	TIBETAN	TIBETANREF	GURUNG	TAMANG	BISWAKARMA	不 明	合 計
CHAWA		2				2			1				1						6
CHUSERAWA				1	1	1				2			4		1	1		4	15
KAMPA													1						1
LAMA																			0
MENDAWA								1							1			1	3
PALDORJEE				1														1	2
PHURAKPA																			0
RONSERAWA		1		1	3								2					3	10
SALAKA																			0
SHANGU																			0
SYURE													1					1	2
THAKTOKWA						1		1							1				3
TIBETAN		1			1	2		1					11		1			3	20
TIBETANREFUGE														13					13
GURUNG		3		2		2			1				1						9
TAMANG																		2	2
BISWAKARMA																	5		5
不 明	1	4		1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		13	26
合 計	1	11	0	6	5	9	1	4	3	2	1	0	22	13	5	1	5	28	

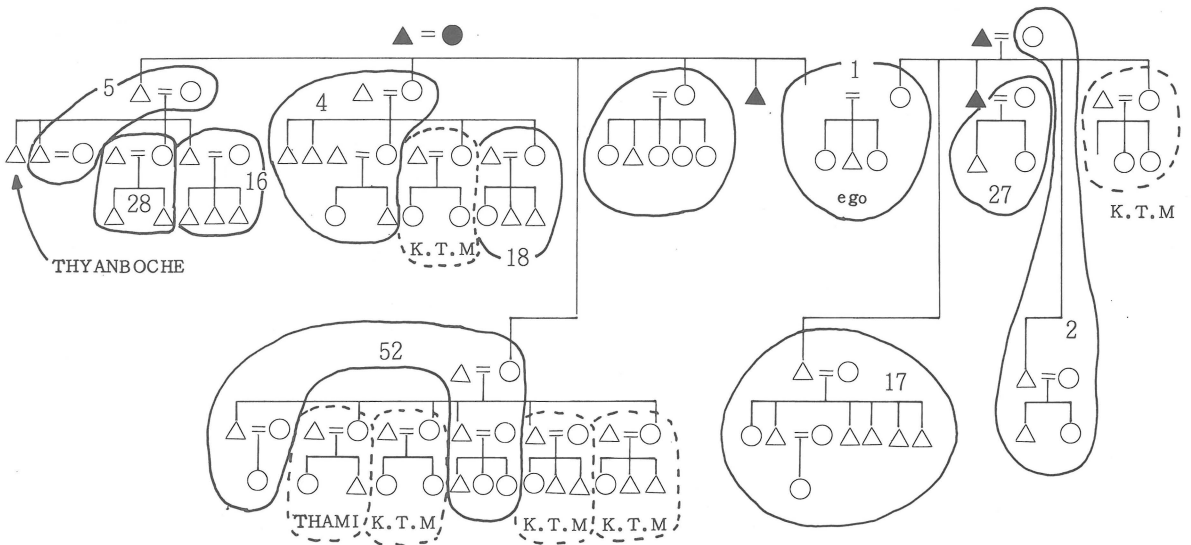
3. 村人としての認知—ドゥムジのラワー

オピッツの仮説によればシェルパのルーはシェルパ社会への参入の歴史順に並べる事も可能である。またナムチェの事例はルーとは別のシェルパとそれ以外の階層構造の存在を教えている。このシェルパ、ティベタン、リフュージ、ネパーリーの4つの層のうちネパーリーをのぞく3つについてはハイメンドルフの仮説でもある開放的なエスニシティの図式を適用してもよい。しかしその開放性の根拠は何によって与えられるのか。つまり

ティベタン・リフュージがティベタン、さらにはシェルパと認知されるにいたる動態はどのようなものか。

このエスニシティ形成の動態分析の問題は今後の課題であるが、ナムチェでは一つのヒントを得ることができた。それはクンプ・シェルパ最大の祭であるドゥムジの運営が毎年回り持ちの8人にまかされているという点からである。この毎年選ばれるドゥムジの8人の運営者はラワと呼ばれ、祭運営はすべて彼等に任される。このラワの成員

図1 ナムチェのある世帯のナンバ



註：K. T. Mはカトマンドゥ在住

番号はナムチェ内での世帯番号

になれるかどうかということは、このラマ教の世界ではきわめて重要なことに違いない。ラワには一つの世帯から世帯主になる。現在ラワになれるのは80人ほどだといわれる。現在では各戸10年に一度、ラワの役割が回ってくることになるのだが、以前は5年に一度くらいであった。ラワ成員は増えていることになる。このラワ成員の増加は移動してきたティベタンのラワ成員化によるものも含まれると考えられるのである。

約130戸のうちの80が村の支配構造の中心にあってその周辺にさらに階層化された層が存在し、それらが徐々に村人として認知され（ラワ成員化）中心へと入っていく、という図式を仮説として描いておこう。

ラワ成員の約90年分のリストが村の長老ゲルツェン氏の手元に現存し、わたしたちもそれを書き写させてもらってきたが、名字が連続しているわけでもなくいまのところ連続性の同定が十分ではなく次回ナムチェを訪れたとき一人ずつ確認する以外にはない。

4. 村人の他出とその後の関係—ナンバ—

ナムチェの89年9月現在の人口動態を見ると

（表3）25歳のところで大きく人口が減っていることに気づく。聞き取りによればカトマンドゥその他への他出が主要な減少の要因のようである。この他出したメンバーとの関係はどのように結ばれているのか。ドゥムジの時には彼等から金銭や食物が送られてくるという。とりわけラワの順番の時にはほぼ全員から送られてくると言われる。

日常生活でつきあいをもつ親戚はナンバとよばれ双系にひろがる。そのナンバの関係は他出しても維持され先のドゥムジの時に集まる金銭や食物はこのナンバの範囲から集められるのである。図1はハウス番号①のナンバを示しているが、カトマンドゥへの他出家族が多い。

カトマンドゥのトレッキング会社がナムチェのシェルパとガイドとしての専属契約を結び、ロッジとも契約を結んで客をおくりこんできた。カトマンドゥへでたナムチェのある青年はトレッキング会社を経営し、その情報と客をナムチェへと送り込むという。このような事例はまだ少なく、今後ともそれほど多くはならないのではないかという。なぜならナムチェにトレッキングする客の多くは外国人でありそれらの客の情報は大きなツアー会社が握っているからだ。

表3 ナムチェの人口構成 1989.9

	男	女
0- 4歳	12人 (4%)	12人 (4%)
5- 9	33 (10)	29 (9)
10-14	46 (14)	34 (11)
15-19	44 (13)	38 (12)
20-24	47 (14)	40 (13)
25-29	20 (6)	29 (9)
30-34	19 (6)	16 (5)
35-39	17 (5)	13 (4)
40-44	17 (5)	17 (5)
45-49	28 (8)	27 (9)
50-54	14 (4)	19 (6)
55-59	16 (5)	9 (3)
60-64	6 (2)	7 (2)
65-69	5 (2)	8 (3)
70-74	3 ()	5 (2)
75-79	1 ()	2 (1)
80-84	3 (1)	6 (2)
85-89	2 (1)	0 ()

333

311

注) 使用人は除いた

それにしてもチベットからナムチェへ、途中のある時期ダージリンで「シェルパ」の名を馳せた彼等はさらにはナムチェからカトマンドゥへと社会関係のネットワークを拡大してきた。

これらの社会関係の根幹を捉えるにあたって以下のような作業が可能ではないかと考えている。
①チベタンからナムチェ・シェルパへの村人化の一つの契機としてラワへの加入の条件やその時期を明らかにする。
②ナムチェ村の中での社会関係の一つの規範をルーの成員やその規範から具体的に検討する。そしてさらに③村の外へ拡大する関係をナンバなど親族を中心にしたネットワークでとらえてみる。

そしてこのような社会関係の分析を、土地所有とその一筆づつの位置関係の分析(月原)、経済構造の分析(河合)とをあわせて、全体として彼等の環境世界を再構成してしておく作業が必要であろう。

5. チベット世界とネパール国家

以上のようなチベットの伝統の維持と同時にナムチェには行政的にはパンチャヤットが形成され、村の中も3つの行政区=ワードにわけられている。また村の中には軍隊が駐屯し、ネパーリーの衛生官、警察官が常駐している。そういう意味ではナムチェも当然の事ながらネパール国家の支配下に置かれており、その規範は法、学校制度などさまざまなところに浸透している。ヒマラヤ世界ないしはチベット・ラマ世界のアイデンティティとネパール国家の枠組みとは日常的には穏やかに調和しているようである。

しかしかれらの構成するのはやはりチベット・ラマ教的環境世界であり、それ以上に彼等自身の生態系のなかで形成された生活の秩序である。たとえばナムチェの採草地や森林がナショナルパークに組み込まれ、採草、伐採が禁止されるにいったときかれらの生活規範は変更を余儀なくされ、それは彼等の環境認識・環境観の変更をもたらしたであろう。

またナムチェでは村はずれのザロックに住む呪術師が病気の治療をしている。その一方でネパーリーの衛生官が西洋的な医薬の供給を行なっている。村人に聞けば両方にかかるのだと言う。ザロックの呪術師から話を聞いていないが、衛生官のところには松林が報告しているように多くの人が受診にいつている。これらのことも含めた環境認識・環境観とその動態をあきらかにし、それらと医学のグループが分析をすすめていく健康や病気の実態や観念との接点を見いだしていくことができれば、ある意味では医療人類学的な応用人類学の方法の発見が可能であろうというのが予備調査から得られた希望的な観測である。

文献

Furer-Haimendorf, C. Von (1975)

"Himalayan Traders", Jhon Murray Ltd., London.

— (1984)

"The Sherpas Transformed" Sterling Publishers Pvt. Ltd., New-Delhi.

Oppitz, M., (1974)

Myth and Facts: Reconsidering Some Data

Cencerning the Clan History of the Sherpa
in "Contributions to the Anthro-pology of

Nepal" ed.by C.von Furer-Haimen-dorf War-m
ingstar,Wilts.,Aris & Phillips.
